

京極読書新聞 <第22号>

発行日 平成23年 5月 1日(日)
京極町生涯学習センター湧学館

京中生に インタビュー

2011

第1回

今年もやります、「京中生にインタビュー」。
今を生きる中学生たちは、いったいどんな本を
読んでいるのでしょうか。<編集部>

澤 晶弘くん(1年生)「福沢諭吉」 遠藤悠人くん(1年生)「野口英世」

——新しい図書室、ちょうど昼休みなどで、人がばんばん来ますね。やっぱり、みんなが本を囲んでいる風景はいいなあ。

遠藤 ドアのある昔風の図書館がなつかしいような気持ちもちょっとあります。

——私は南京極小学校の「出前図書館」を思い出しました。

澤 南京も給食テーブルと書架が並んでいる部屋でしたから。

——図書館スペースに入ったら、ほんとにあっ！という間に書架の本に手が伸びる。脇のテーブルですぐに読み始められる。こういう動きが自然に流れるようにできるところがいいですね。中学校の書架におもしろそうな本、ありましたか？

遠藤 まだ本は全部並んでいないのでこれからです。僕は物語が好きなので、そういう本があるかどうか楽しみです。

澤 僕はポプラ社の「6月6日のゴースト」という本を見つけました。毎日、スクールバスを待つ間におもしろく読んでいます。

——ところで、お二人ともずいぶんシブい本を選んだんだね。「福沢諭吉」に「野口英世」。なんか、おじさんの子どもの頃に戻ったようなラインナップです。

遠藤 先生のお勧め本です。

——なるほど。で、「福沢諭吉」という人はどういうところがよかったですか。

澤 小さい時から「みんな平等」という考え方をしっかり持っていたところがすごいと思います。「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」という言葉を本気で生きた人なんだということがわかって感動しました。

——「福沢諭吉」も「野口英世」も、一生懸命勉強しますよねえ。

遠藤 野口英世は大変な努力家だと思います。また、お母さんや学校の先生など、いろいろな人が英世を助けてくれるのですが、その恩に報いようとしてさらに努力するところがすごい。そういう、あまり教科書では出てこない話がこの本にはいっぱい入っていて、そこがおもしろかったです。

澤 僕は、日本を飛び出して、外国を旅してまわる福沢諭吉がおもしろかったです。

——そうだねえ。みんなもこれから旅立ちですね。新しい中学校での生活、思いっきり楽しんでくださいね。



京極読書新聞は
毎月1日発行です。



2, 3ページに続きます

熊谷朱里さん(3年生)「最後の卒業生」 吉川美鈴さん(2年生)「青い鳥」

——新しい校舎、いいですねえ。

熊谷 前より明るくなったような気がします。

吉川 広くなったような気がします。

——そうですね。休み時間や昼休みの様子を見ていると、なにか、生徒の動きがとてもなめらかな感じがします。パタパタうるさくない。午前中、図書館の閲覧テーブルで先生たちと会議していたんだけど、休み時間に脇の廊下を生徒たちが通っても全然気にならなかったです。校内はものすごく見渡しが効くし、自然光なので心が落ち着きますし。孤独感とか孤立感みたいなものとは縁がないような校舎ですね。なんか、熊谷さんが書いた「最後の卒業生」たちがひょっこり顔を出しそうな。

熊谷 財政破綻におちいった町、夕張に生きる中学生という物語なんですけど、全然暗くない。修学旅行で行った東京都庁で夕張メロンを売ったり、ホームルームで夕張PRプロジェクトを討論し合ったり、とてもたくましいんですね。逆に、こっちの方が、京極町の町づくりについて考えさせられたりして。

——みんなも充分町づくりの役に立っていると思いますよ。例えば、こうやって「京中生にインタビュー」の写真が京極読書新聞に載るでしょう。そうすると、町の人ははじめて「ああ〇〇さんの娘さんも元気でやっつんだなあ」って安心するんだから。「あの息子さんが読んでいた本、私も読んでみよう」とか、そうやって町に活力が広がって行くんだから。これも立派な町づくりなんです。

熊谷 そうですね。

——私は、本の途中で、アルベール・カミュの「ペスト」という小説が出てきたあたりから俄然おもしろくなって、一気に読んでしまいました。「ペスト」と「夕張」の町を重ねた人を初めて見ました。

熊谷 「ペスト」も深い話ですね。

——えらい！「ペスト」も読んだんだ。読書の大道を歩んでますね。吉川さんの「青い鳥」にも、草野心平の有名な詩「蛙」が登場するんだけど、こういう、作者が自分の本の中にあえて出してきた作品名には、作者の万感の思いが込められているんですよ。まさに「たいせつなこと」なんです。

吉川 重い吃音者の国語教師、村内先生が「蛙」の詩をおしえてくれるんですよね。うまくしゃべることができないもどかしさを一番よく知っている村内先生だからこそ、頑張って口に出した「たいせつなこと」だったのでしよう。

——いい詩ですよ。

吉川 私はこの本の中の「おまもり」という短編に感動しました。この世に「ひとりぼっち」だ…という意味が村内先生の一言でぐると「たいせつなこと」に逆転して行くことにとても励まされました。この本に出会って、村内先生に出会って、なにかたいせつなことを気づかされたと思います。

——吉川さんの感想文のしめくり、「村内先生、ありがとう。」はよかった。みんな、そんな気持ちになりますね。

京中生に
インタビュー
2011
第1回



京中生に
インタビュー
2011
第1回



「福沢諭吉」 浜野卓也文/ポプラ社
「野口英世」 浜野卓也文/ポプラ社



「最後の卒業生」 本田有明著/河出書房新社
「青い鳥」 重松清著/新潮社



後志シネマ散歩

第1回 喜びも悲しみも幾歳月

湧学館司書 新谷 保人 (あらや・やすひと)

昭和7年、新婚早々の灯台守夫婦・有沢四郎ときよ子は観音崎灯台に赴任。その後も転勤を繰り返し、北海道の石狩灯台で、雪野、光太郎の二人の子を授かる。戦争で多くの友を失うなど苦しい時期もあったが、同僚や家族に励まされながら灯台の火を守り続ける。御前崎灯台の台長として赴任する途中、雪野の結婚話がまとまる。雪野の夫の勤務地カウロに旅立つ船に向かって、二人は灯をとます。

「喜びも悲しみも幾年月」。舞台は戦前ですが、撮影は昭和32年(1957年)。映画の中でもひととき印象的なのが「石狩灯台」時代。海からの猛吹雪について札幌の病院へ馬そりを出す場面など、憶えていられる方も多いのではないのでしょうか。

石狩灯台は記憶にあるけれど、どうしてこれが「後志シネマ散歩」の第1回なんだろう？ 後志の灯台なんか映画に出てきたらどうか？ 不思議に思われる方もいるでしょう。じつは、後志の灯台は、ちゃんと「喜びも悲しみも幾年月」に映っているのです。

それは映画のラスト。「完」の文字とともに、遠く霧の中にある灯台が映ります。これが小樽・高島岬の「日和山(ひよりやま)灯台」。

「喜びも悲しみも幾年月」は、灯台守夫婦の赴任地に沿って、「観音崎灯台」「御前崎灯台」というように、その灯台の名前が画面の下に出てきます。けれど、この「日和山灯台」だけは、そういうクレジットがありません。これを、今まで夫婦が巡ってきたいくつもの灯台を総称する記号、いわば「灯台の中の灯台」としての姿が「日和山灯台」には象徴されているのだと言う人もいます。たしかに、それくらい美しい。



でも、美しさだったら、「石狩灯台」だって負けてはいないだろう。あの石狩川河口の砂浜にすーっと立つ赤白の灯台は美しいよ。そう言う人もいるかもしれませんね。ただ、問題は、その赤と白の縞模様。

石狩灯台は、もともと白一色の灯台でした。ところがこの「総天然色映画」(当時はカラーとは言わなかった)の撮影のために、赤と白の縞模様に塗り替えられてしまったのです。雪と同じ白一色の灯台では、「総天然色」の映画では効果が出なかったからです。ところが、この赤白の灯台は目立つので評判がよく、その後積雪の多い地方では順次採用されることになったのです。まさに、「ひょうたんからこま」といったところでしょうか。なお、この赤白の縞模様、塗り替えられる度にその位置が変わっているそうです。

(『歌碑』喜びも悲しみも幾年月)HPより)

そうですか。あの美しさも木下恵介監督の創作だったんですね。



▲ 小樽・日和山灯台

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

